

# 第6回地域福祉推進のための講演会 開催記録

## 1 概要

- (1) 日 時 平成25年6月2日(日) 午前10時から正午まで
- (2) 場 所 長久手市福祉の家 2階 集会室
- (3) テーマ 「私にできること 私がしたいこと」
- (4) 講 師 佐野 治氏(愛知県立大学 教育福祉学部准教授)  
松宮 朝氏(愛知県立大学 教育福祉学部准教授)
- (5) 参加者 78名

## 2 開会 あいさつ(福祉部長)

本日の新聞記事によると、2012年時点で65歳以上の高齢者のうち、認知症の人は推計15%に上るとの報道もありました。今後、急激な高齢化が予測される本市においても、地域のつながり、地域による見守りが必ず必要になると考えています。

この今回の地域福祉計画の策定は、ひとつの大きなチャンスと捉えており、市職員と市民、市民と市民等と一緒に話し合い、考え、取り組む場を作ることが非常に大切であると考えていますが、市役所はこういった場を作り、人を集める良い方策を持っていません。

今後は、今回の市民アンケート調査結果等を地域のみなさんにお伝えし、地域の課題について考えるための学習会を開催していく予定ですが、みなさんの協力を得ながら一人でも多くの方にご参加いただけるよう努力していきたいと思います。

## 3 講演「地域福祉に関する市民アンケート調査の結果報告」

講 師：松宮 朝 氏

配布資料に沿って、アンケート調査結果から見えてきた長久手市の特徴、課題を踏まえ、今後の計画策定の進め方、方向性等について提言を受けた。

### (1) 福祉制度・サービスに対する認知度の低さ

まず、地域福祉計画策定に向けて最も重視すべき点は、長久手市、および長久手市社会福祉協議会の福祉制度・サービスに対する認知度の低さであり、特に認知度が低い10～40代への広報活動である。また、認知度の地域間格差への配慮も必要である。全般的に、東小学校区での認知度が高く、逆に市が洞小学校区で低い傾向が認められ、単に年齢構成による違いだけが原因ではない。

## (2) 近隣での支援、ボランティア参加の低さ

地域活動、特に近隣での支援、ボランティア参加の低さである。なかでも10~40代で特に低い傾向が認められる。ただ、「支援したいが、何をすればいいかわからない」と回答された方でも、見守りや話し相手のような身近な支援の可能性を回答しており、支援に対するイメージを喚起する情報提供、活動を促すモデルがあれば、支援につなげていくことが期待できる。

また、ボランティア参加の希望では、災害時の援助、環境美化、芸術・文化・スポーツ、まちづくり等に関する活動への関心が高くなっており、これらの活動と連動する形での地域福祉ボランティア支援を進めていくことが一定の有効性を持つと考えられる。

## (3) 福祉以外の事業との連携による強化

生活上の不安として、「災害時の備え」、「介護の問題」、「経済的な問題」、「地域の治安」等が多く解答されており、こうした課題との関連も考慮すべきと言える。

今後は、様々な行政によるサービスと福祉サービスとの連携という課題に取り組むことが重要であり、逆に、ここから福祉サービスを充実させていくという道筋も期待できる。

## 4 テーブルトーク コーディネーター：佐野 治氏

### ＜話題提供&進め方説明：15分＞

アンケート調査結果においても約7割の人がボランティア参加の経験がないと回答している。しかし、実際にはボランティアに参加してもよいと考えている人もたくさんおり、参加したい人と手助けを必要とする人をうまくマッチングできる仕組みが必要である。計画策定の取り組みを通して、様々なネットワークを築くことが必要と思われる。

### ＜話し合い：40分＞

アンケート調査結果の報告や話題提供を受けて、各自が感じたこと、どんな取り組みが必要か、できるのかをグループで話し合う。

### ＜とりまとめ&発表：25分＞

グループの話し合いにおいて、どんな話し合いをしたかを、グループの記録係が発表した。

## (1グループ)

- 市内で事業所を運営しており、民生委員の方との連携の方法を考えている。例えば、利用者の同意を得て、情報提供できないかと考えている。
- 昔からの伝統も大切にしている地域に住んでいるが、新しく入居された方との交流ができていなかったり、温度差があることを感じている。
- 民生委員として、独居世帯の把握はできても、昼間の独居の把握ができていない。もっと情報が欲しいが、なかなか、声をかけられる状態でない。
- 市民自身に、まだまだ行政がなんとかしてくれると思っている傾向が強い。地域共生ステーションのような場を活用しながら、何をすべきか考える場がほしい。
- MJM（自分のまちは自分で守る）の活動をしている。各小学校区で様々な取り組みを行う予定であるようだが、自治会は必ずしも小学校区と一致していないこともあるため、その点の調整が必要になると思う。
- アンケート結果に、Nバスの話がでていたが、1人1人のニーズが違うので、本当に利用のニーズがどこにあるのかの調査も必要になってくる。
- 地域ごとの特徴があるが、どの地域にも共通して言えるのが、幅広い世代を引っ張り出すことができるキーマンが必要であることだと思う。

## (2グループ)

- 地区のニーズをキャッチして、どう行政につなげていくかが大切。
- これからの時代は社会保障費の支出が増加しても、人口減少などにより歳入の増加を見込むことができないため、地域でできるものは地域でやっていく必要がある。
- 地域で話をする機会がないと感じる。そもそも近所の人と会う機会がないし、まず知ることができない。近所の人と関わらないことはすごく快適な状態であるが、問題が外に出てこないし、災害時などの有事にはどうするのかと危惧している。
- 自分が住み始めた30年前はつながりが強い地区（南小校区）だったが、高齢化して世代が替わり、「自分のことは話したくない、関わってほしくない」と思う人が増えたように感じる。ただ、大きな問題に対してはまだ団結力があると思っている。
- いきいきクラブなどをやっているが、いつも同じ顔ぶれで、単身高齢者など、出てきて欲しい人ほど参加されない。
- 近所の70代の人とはよく話をするが、市内は犯罪が無いと思っている人が多い。
- 子育て世帯と高齢者世帯が分離している。民生委員だけでは問題が多すぎて対応できないのではないか。

### (3グループ)

- 東小校区で福祉に関心が高いのは、それだけ住民が困っているという事情があるからだと思う。私には助けてという悲鳴が聞こえる。
- サークルKが撤退し、公園西駅から以南は買い物ができる店舗がなくなった。6/4からシニアクラブで依頼して業者による移動販売を始めるが、個人的には、移動販売の開始は時機尚早と感じている。まだ、動ける人は自分で買い物に行くほうが良く、移動販売によって自ら出かける機会を無くすことにならないかと心配している。
- 三ヶ峯地区のNーバスは1日7便だが、1便は早朝の通学用で実質6便である。市に増便を要望しているが、バスの台数に限りがあり現状では難しいと言われている。
- 市のワンコインサービスには期待をしている。助ける人がグループで登録する必要があるというネックはあるが、蛍光灯の交換など気軽に頼めるのではないかと思う。
- ボランティアプラザの相談員をしていると、声掛けに対して拒む人もいて、そういう人には介入できない。隣近所に住む人にあまり家の中など見られたくない、という気持ちがある人もいるので、ケースバイケースでの対応が必要。
- 三ヶ峯には2つの自治会があるが、課題は自治会に入らない人がいることと、自治会の役員になりたくない、という人がいることが多い。
- ワンルームの共同住宅に住んで7年目になるが、自治会加入の案内チラシが一度郵便ポストに入っていたことがあるが、昼間は仕事をしていて連絡も出来ず、現在自治会には入っていない。同じ共同住宅の住民も同じような状況だと思う。

### (4グループ)

- 社会福祉協議会などの認知度が低いとのことだが、地域の集会所などで報告会などをしてはどうか。それが地区社協につながるのではないか。
- 民生委員・自治会など、地域に関わる人の情報共有が必要。知るべき人が、知りたいときに、必要な情報を得ることが大事。お互いの活動を知るために、市民交流が必要。若い人を地域の活動にどれだけ巻き込めるかがポイントだと思う。
- グリーンロード以南には以前は何もなかったが、住宅が立ち並び、交番もない状態で治安に不安がある。新しい街なので、まだ地域のみんなで集まれる場所が少ない。
- 市ヶ洞小校区で、社協などの認知度が低いことが意外であった。独居高齢者の方に、シニアクラブの情報を提供したいが、クラブ自体がない地域もある。  
今後、民生委員として、シニアクラブとも連携できるといいと考えている。
- まちづくりセンターの位置づけがあいまいのように思う。せっかく、いいイベントがあっても行政等からの情報の伝達不足によって後から知るときもある。

- 長生学園は、今年から随行にボランティアを活用するとのことだが、とてもいい取り組みだと思う。
- 地域包括支援センターが、北小校区にもできるといいと思う。シニアクラブの活動をとおして、独居高齢者・独居高齢者の予備軍が多くなっているように感じている。地域での防犯パトロール活動が増えていることは、良いことだと思う。

#### (5グループ)

- 市が洞小校区は歴史が浅いため、制度等は浸透していないが、地区の防災意識や子を持つ母親同士のつながりは、他の地域より強いと思う。
- 最近、子ども会に入らない人が多い。子どもが6年生になると役員がまわってくるので、その前にやめてしまう人がいる。
- つながりを持つために夏休みのラジオ体操を復活してみてもどうか。
- 西小校区では地域の古い方と新しい方との融合がうまくいっていない部分がある。
- ボランティア活動だけでは継続しないので、活動以外の楽しみが必要である。
- 広報や回覧等で情報を伝えようとしているのはわかるが、特定の人にしか伝わっていない。新たな情報伝達手段について考える必要がある。
- 親の世代に比べて、自分たちの世代（30代）ではつながりが薄くなっている。
- 住んでいるマンション内でも、つながりを持ちたい人と持ちたくない人に分かれてしまっている。

#### (6グループ)

- 地域包括支援センターが市内に2か所しかないのは少ないと思っている。高齢者が相談しようにも遠くて相談に行けない。最低でも3か所に増やすべきではないか。
- 高齢者が引きこもっていることが問題。どうやって外に出すかを考える必要がある。Nバスをもっと活用できるようにする、祭、集まる場所、組織を作る等。
- それぞれの組織（シニアクラブ、自治会等）がどのような活動をしているのかがわからない。関わりがないため、知る機会がない。
- 地区社協を設置することも大切だが、地区ごとの特性に合わせた場所にするべきだと思う。高齢者が多い地区には介護の相談員をつける、子どもが多い地区には子育ての相談窓口、交流スペースを作る等
- 市の東部地区に住んでいるが、昔から住んでいる人が多く、保守的であると感じる。地域のつながりは強く、西部地区とは違いを感じる。

- 区会費を支払っている地区と支払っていない地区がある。区会の活動費にも差があり、地域性を感じる。市が洞地区には消防団がない。
- 市役所の仕事の割り振りがよくない。この仕事は他の課の仕事などと言っているのは連携ができない。7月の機構改革でよくなればいいのだが。
- Nバスのコースが悪いとは思いますが、変更するたびに便利になる人と不便になる人がいるので、広く意見を反映したものにしてほしい。

#### (7グループ)

- 地域のつながりがなくなってきたため、困っていることを言えない人もいる。地域共生ステーション構想があるが、男性は頭の切り替えができない。
- 民生委員のことを地域の方が知らないなので情報発信が必要。地区ごとの民生委員が集まって、社会福祉協議会の方を呼んで意見交換すればよいのではないか。
- 地域の実状などが分かったので、このような場があることは素晴らしい。
- 社会福祉協議会の事業内容が不明なのでPRするとよい。
- 東小校区においても世代交代が進み、親世帯と子世帯では感覚が違う。先日の視察で、福祉協力員制度があった。地域で知った情報が民生委員へ入る情報システムになっていた。
- 民生委員の役割・仕事を市民に発信してほしい。民生委員として、老人会や自治会の会合に顔を出す機会があるとつながりができてよい。
- 民生委員全体の会議では、具体的な細かな情報を共有できないので小学校区ごとに分けられるとよいのではないか
- 長久手に住んで約20年。前にすんでいたところは地域の結びつきが強かったが、長久手はない。学区と自治会のエリアが違うことが不思議。

#### (8グループ)

- 南小校区は、選挙の投票率が一番低く、干渉されることを嫌い、お祭り等の行事への参加も少ない。年齢を超えた付き合いが実現できたらすばらしいと思う。
- 高齢者へのサービスは、形式的なサービス提供でなく利用者の意見を聞いてほしい。
- 定年退職した人が活躍するは素晴らしい。子ども相手や介護者の話し相手のボランティアをしている人は、ボランティアをしているという意識がないかもしれない。
- 公共施設が東に寄りすぎている。PTA・シニアクラブ・子ども会などの連携が必要。民生委員も一緒になった協議会が必要。民生委員も全然知らない。行政サービスも数年前までは、たらい回しだったが、最近は大いぶよくなった。

- ・見守り・声かけが基本。市が洞地区自治会連合会も半分は若い人で、お祭りには3,000人も集まってくれた。個々のケースの対応には行政にも限界があるので、市民同士がやらなければいけない。

#### (9グループ)

- ・「平成子ども塾」と学校の手伝い（農業系）をしているが、ボランティアが少なく体調不良の時も休めない。ボランティア募集のチラシを配ったが効果もない。
- ・同世代の妻と息子の3人家族。最後まで自宅だと考えているが、息子一人で二人の介護と仕事は両立できない。介護施設に入るにしても、すぐには入れないと聞いた。自宅周辺には高齢世帯が多く、民生委員が誰かも分からない。まとめ役になって行政に働きかける人が地域にはいない。
- ・70歳の妻と2人暮らしをしている。若い世帯は防災訓練にも出てこない。災害の時に助けて貰えるかが心配で、自宅前を掃除する時に会う人（自宅前に公園がある）に話しかけ、高齢世帯であることを伝えている。
- ・妻に迷惑をかけてはいけないと若いころから洗濯や調理は自分で行ってきた。自分のことは自分で行うことが立派な社会貢献になると思う。
- ・50～60代の元気な方に、ボランティア活動に参加してもらえないかと思う。
- ・介護保険だけで在宅介護を支えるのは難しく、サービス以外の時間の対応が課題。生涯学習講座等とのマッチングを行って、サービス以外の時間を活用できないか。
- ・ボランティア活動が楽しい、地域から頼りにされていると感じれば輪が広がるのではないかと。支援したい人、支援を受けたい人をマッチングできる場が地域に必要。

#### (10グループ)

- ・佐野先生と飲み会がしたい。堅苦しい話だけでなく、アフリカ等海外での活動体験について聞いてみたい。
- ・大人も子供も教育が大事。子供は、親の姿をみて子は育つので、近所付き合いしない家は同様に近所付き合いしない子が育つ。
- ・個人情報保護が問題になるが、非常時には個人情報より命が大切。非常時には、個人情報保護条例を撤廃するといった思い切った方策を打ち出してはどうか。
- ・必要を感じない人は行政サービスに関心がない。各種サービスの概要でいいので、入口的に分かるものを用意してはどうか。
- ・市内に宿泊可能な公共施設を作ってはどうか。日進市では毎年、親子で体育館に宿泊し、避難所体験（昼食：飯盒炊飯→段ボールハウス作り→夕食：昼食の残ったご

飯でおにぎり作り) をしている。楽しみながら避難所の不便さや非常時の体験ができて喜ばれている。

- リリモウォーキングなど、人気のあるイベントに絡めて、市内避難所めぐりなど有益な情報発信をしてはどうか。
- 認知症サポーター養成講座ではオレンジ色のリングをもらえるが、同様に環境・防災といった様々な内容の講座を受講すると色違いのリングを配り、いくつ集めると何かもらえるといった、メリットや参加しやすい雰囲気づくりをしてはどうか。
- 講演会や勉強会等、出ない人はずっと出てこない一方、参加する人はリピーター化する。全体の意識向上が必要。
- 地域の情報を民生委員に伝える人が必要。民生委員1人が担当する範囲は広く、全て把握することは難しい。
- 自治会の防災訓練には、旧住民より転入者の方が参加率が高い。旧住民は役所任せの考えの人が多い。
- いざ困った時、福祉サービスを知らない。近所の人にも聞けず、市役所に行くという考えないため、問題が悪化してしまうケースが少なくない。
- 地域福祉計画といっても、地域性があり1つにまとめられないのではないかと。
- 近所で声掛けしてくれる人がいると助かる一方で、挨拶程度の付き合いの人には、その人の詳細がわからないので聞いてあげづらい。
- 勉強会などの集まりは、継続することが大切。2回目からを「ステップアップ講座」としてしまうと参加率が下がるので、名称の付け方、運営の仕方にも工夫が必要。

## <まとめ>

たくさんのユニークな意見をいただくことができました。みなさん話し合いを聞いていて感じたのは、これまで一般的に福祉と言われてきた3分野(高齢者、障がい者、児童)に限らず、幅広い分野での総合的な取り組みが必要であるということです。

一方で、東日本大震災のような甚大な被害をもたらす災害においては、隣組や班といった非常に狭いつながりにおける支え合いが最も有効であるという事実があります。

今回の地域福祉計画等を策定においては、市民のみなさんの関心の高い防災、防犯といった課題もひとつのキーワードとして、多くの市民の方に参加いただけるような取り組みとしていけると素晴らしいと思います。

(以上)